



Relive Journal

りらいぶ ジャーナル No.45

2022年 錦秋号 (10月31日発行)

< “りらいぶ” 憲章 >

- 組織、肩書き、経歴にとらわれない自由な生き方
- 知識、経験、技術を生かして社会に貢献する生き方
- 初心に帰って新しい自分を発見する生き方

私たちNPO法人リタイアメント情報センターはこのような生き方を“りらいぶ”と呼び、
その生き方をサポートします

<目次>

- | | |
|--------------------------------------|--------------------------|
| 1. 新年度のご挨拶 | (理事長竹川 忠徳) |
| 2. 新年度を迎えてのご挨拶 | (関西支部長 阿賀 敏雄) |
| 3. 曾根源蔵さんを悼む | (西澤 信善) |
| 4. (楽しい人生を求めて)「生涯自分の足で歩くことの難しさ」 | (会員 渡嶋 八洲夫、
会員 斉藤 秀子) |
| 5. これ、何と言うの？」小さなモノの名前 | (松永 和子) |
| 6. バリ島 チャンディダサの日々⑤ 大漁に沸き返った浜辺 | (会員 黒部 正也) |
| 7. バリ島 チャンディダサの日々⑥ ナディさんのカウベル | (会員 黒部 正也) |
| 8. 団体走行は効果的？ | (会員 鳥居 雄司) |
| 9. 7年間務めた事務局を振り返って | (会員 島村 晴雄) |
| 10. 『アイヴィン達が君のことを平均的カナダ人より上だ。』と言うので。 | (会員 赤神 潔) |
| 11. 事務局だより | |



1. 新年度のご挨拶（第 16 期）

NPO 法人リタイアメント情報センター

理事長 竹川 忠徳



「日残リテ 昏ルルニ 未ダ 遠シ」
藤沢周平著・三屋清左衛門残日録より
私共 NPO 法人リタイアメント情報センター関係者諸氏に於かれましても、昏ルルまでの大切な日々を有意義にお過ごし願いたく存じます。

近頃巷では、スローライフ(和製英語:Slow+Life)という言葉をよく耳に致します。Google で調べたところ「効率やスピードを重視するのではなく、のんびりと過ごしながら人生を楽しみ、生活の質を高めようとする」とありました。将に、「昏ルルまでの充実人生」です。

- ・気の合う仲間と共に過ごす
- ・新しい世界を知り、趣味や習い事を始めるチャンスを得る
- ・好きなことに没頭する
- ・・・・等々の 「遣り甲斐 Be worth doing」を以って日々を充実させることに他なりません。従いまして、私は阿賀関西支部長も信条とされている「人を助けて我が身楽しむ」を心の正中に備えて、皆様共々今期は、Be worth doing を求め続ける所存です。

当該 NPO 関係者諸氏に於かれましても、りらいぶジャーナル等の手段を通じて、Be worth doing の場や情報等の授受を下されつつ、充実人生をお歩み賜れば幸甚に存じます。

昨今の寒さに向かい、コロナ禍・第8波のニュースが流れている折柄、くれぐれもご自愛のうえ歩をお進め下さるべく、祈念致しております。

(新体制につきましては事務局だよりに掲載しております。)

2. 新年度を迎えて（第 16 期）の

NPO 法人リタイアメント情報センター

関西支部長 阿賀 敏雄

運営委員会(伊丹淳一さま岸本隆司さま越智克司さま石尾賢一さま)を発足し、ベルウッドさんをメイン会場として催しの充実をはかります。引き続き皆様のご指導ご鞭撻をお願い申し上げます。



《 主な催し予定 》

- 森本敏さまを囲む会
- MK 勉強会
- 株式投資教室
- リタメンゴルフ会
- 桂三若師匠独演会
- 誕生日会



3. 曽根源蔵さんを悼む

西澤 信善

「心が折れる」という言葉がある。衝撃を受けたときに使う言葉のようだ。曽根さんの訃報に接したとき、まさに「心が折れた」。ショックだった。

最後にお話したのは、4月頃ではなかったかと思う。何かの所用があり、お電話した。お出になられてこう話された。「心臓の病気で倒れ、しばらく入院していました。いまはもう退院し、回復に努めています」ということであった。しかし、それが最後の会話になるとは思いもよらなかった。次にお電話したのは7月10日ころであった。畏友・須賀寅充君の演劇があり、終わった後、東屋さん、越智さんの3人で一杯飲みに行った。その席上、「曽根さんはどうしておられるかな、連絡をとってみよう」ということになった。携帯にお電話したがお出になれなかった。あとでふと気が付くと留守電が入っていた。その留守電で曽根さんがお亡くなりになったことを知った。すぐに確認の電話をいれた。やはり間違いなく、7月3日にお亡くなりになられたとのことであった。

曽根さんと知り合ったのは、大阪工業会の若手経営者の集まり（青経会）の場であった。私も河瀬義博氏のお誘いでそこに顔を出すようになった。もうかれこれ15年くらいまえのことである。その中にいつもジェントルマン然とした人がおられた。それが曽根さんであった。思わぬ長いお付き合いになるのであるが、その時の印象は最後の最後まで変わることがなかった。まさに正真正銘のジェントルマンであった。スーツにネクタイ姿、言葉は丁寧、穏やかで、いつも淡々としておられた。この会合は5～7人くらいの参加でほぼ月一回のペースで開かれ、百数十回も続く長寿会合であった。それを取り仕切っておられたのが曽根さんであった。政治から経済、時事問題それぞれ思うところを自由に語るのであるが、時にはエキサイティングして話すこともあった。そういえば曽根さんが感情にあらわにするということは、一度足りといえども記憶がない。曽根さんがよく

口にされていたことがある。それは「和」ということである。この会合が10年以上も続いたのはまさに「和」の精神のお陰であろう。

思い出してみると随分と世話になっている。曽根さんは、本当に人間的に暖かい人であった。私はその暖かさに触れた幸運な人間である。私が何か頼みごとをもっていくと少々無理な事でもまず聞き入れてくださった。あるとき、私が中国・大連で世話になった先生を日本に呼びたいと曽根さんに相談したら、「よし分かった」と大阪倶楽部での講演会をアレンジしていただいた。同倶楽部で講演するというのは大変名誉なことであることは後で知った。私の高校の後輩・前田妙子さんが出版された『朝陽、いっぱいありがとう』という本があるが、これを中国語に翻訳して出版したいと言ったら、ロータリークラブから50万円の助成金を取ってくださった。曽根さんは、「これは名著だ。各国語に翻訳したい」と言っておられた。シャンソン歌手のヤスコさんを紹介したところ、大阪倶楽部ピルゼン会のエンタテイナーとして呼んでいただいた。ヤスコさんが理事長を務める関西シャンソン協会にも快く入会され、気軽にコンサートにも足を運ばれた。無理した感じはなく、文人のように音楽を楽しんでおられた。中国から人を呼ぶということが何度かあったが、その都度資金援助をしていただいた。私が出版した本を10冊ボンと買い上げてくださったこともある。私が取り組んでいる運動にも多額のカンパをしていただいた。曽根さんと二人で食事する機会も少なからずあったが、いつもごちそうになった。考えてみれば一度も払ったことがない。曽根さんはそんな人であった。

曽根さんは「争い」を好まなかった。そのことは「和」を大事にされていたことでよくわかる。曽根さんが中心におられる集まりは、いつも和やかで笑いにあふれていた。曽根さんとの談笑は私の人生のもっとも幸福なひと時であった。考えてみれば本当に長い間、お付き合いいただきそしてお世話にもなった。曽根さんがおられなくなって心の支えを失ったようだ。ただただご冥福を祈るのみである。



4. (楽しい人生を求めて) 「生涯自分の足で歩くことの難しさ」

共著 A章 会員 渡嶋 八洲夫
B章 会員 斉藤 秀子

(A章) スポーツによる歩行強化策

若い頃から、生涯、自分の足で歩くことを夢見て努力してきましたが、88歳の2022年2月脳梗塞を患い、夢は一時切断されたがあきらめてはおりません。颯爽と歩くことをいつも夢見てきました。小股歩き、すり足、猫背歩き、にならぬよう努めてきました。

70歳定年をむかえる頃までは脚力の向上には何の苦もなかったのですが、70才頃からから脚力の低下を感じるようになり、更なる強化策を始めました。それまでは脚力の低下は日常の生活のなかで自然と防いでいました、生来スポーツ好きのため日常生活の中で自然と培われていたのです。水泳は6年間、テニスは60年間、ゴルフは30年間親しみました。

(小学校時代)

学校から帰宅すると、数人の友人と釣り餌をもって、近くの川に出かけ、夕刻まで主に鮎釣りに出かけました。よく釣れる場所は複数ヶ所開発しており、その日につれる場所をさぐったものでした。家の前はおおきな運動場であり、釣り行かぬ日は大勢の低学年から高学年まで集まって、戦争ごっこ、騎馬戦、駆け足、相撲、鉄棒、等で夕暮れまで遊びました。走ることはクラストップで常にクラス リレー代表に選ばれました。

(中学・高校時代)

中学・高校の6年間は水泳部員として5月から9月まで練習に明け暮れておりました。シーズンオフは強化策としてマラソンや球技で体力を鍛えました。神奈川県高等学校水泳選手権、関東高等学校水泳選手権。それに特定高校との水泳対抗戦で活躍しました。日頃の練習は厳しくそれでも毎日の鎌倉（雪の下）の自宅から鎌倉駅間の往復40分、藤沢駅から湘南高校の往復40分も当然のごとく歩いて通いました。この6年間で基礎体力はかなり向上したと自負しております。

(大学時代)

藤沢（鵜沼）の自宅から早稲田大学への通学は時間がかかり、2年間だけ柔道部に入部しましたが、たいした練習もせず受け身だけは旨くなりました。

(サラリーマン時代)

幸い就職した会社の工場内にはテニスコートが複数あり勤務前の早朝、昼休み、勤務後もテニスの練習に明けくれました。休日は練習と試合、冬季はコートに霜が降るので東伏見テニスクラブ会員となりテニス練習に励みました。雪が降ると早速コートの雪かきにでかけ、家庭の雪かきはその後だったので家庭では不評をかいしました。

東大和市や瑞穂町の市民大会団体個人戦では数回優勝しました。関東社会人、東京都実業団、多摩社会人等の団体にも参加しました。特に多摩社会人では団体と壮年個人では優勝・準優勝、上位入賞を果たしました。テニスの試合には単（シングルスと呼ばれ自分一人でプレーする）と複（ダブルスと呼ばれペアで対戦する）の2種があり試合は1セットで40～60分が標準でこの間コート内を走り回ることになります。3セットマッチが多く脚力強化にはもってこいでした。

また50歳を過ぎてゴルフを始め、接待ゴルフにも力をいれ、カートに乗ることを極力避け歩きました。多摩社会人庭球連盟では長らく「連盟会計の安定」に尽力し、現在も名誉会員として名を連ねております。

(テニスプレー)





(ゴルフ キャメロン マレーシア)

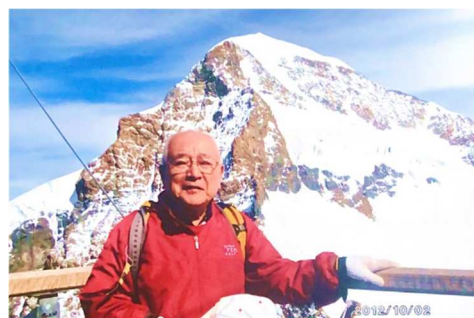


(東京クラブ オープン大会で準優勝)



(70歳の定年を期に一層の脚力強化に努める)
 一日の歩行目標を 15000 歩 (9 キロ) と決め、例えば、東大和市から立川駅や国立駅までは片道 1 時間かけて歩等、一日 15000 歩の目標は確実にクリアしました。小年時代水泳は泳げば泳ぐほど早くなるという経験から歩けば歩くほど良いと思い込み歩行の強化につとめたのが、結果的には過労のため膝痛に見舞われ病院に駆け込みました。サブリのロコモアを飲み一日の歩行目標も無理のない 7000 歩に変えました。80 歳頃の 3 年間スイスアルプスに出かけ、トレッキングを楽しみました。膝に負荷がかかりすぎことも膝を痛める原因であり、若い時と違い加齢とともに無理が効かないこと反省しました。

(スイスアルプハイキング)



折角蓄積した脚力も、2022 年 2 月に患った脳梗塞のため今までの蓄積は消えました。それでも早速回復のためのリハビリを始めました。

(2022 年 2 月からはリハビリの日々)

脳梗塞を患ったが、幸い後遺症も軽くでも歩行には杖を必要でした。

入院した病院ですぐにリハビリが始まり、「将来海外旅行に行けること」を目標として 4 月リハビリ専門病院に転院、週 4 日、リハビリ専門のリハビリ施設でリハビリを続けております。

一日のプログラムは 3 時間です。



- (1) 準備体操
- (2) リカンベント、バイク等の器具による腕・脚部の筋肉強化。ゴム紐等による筋肉強化。
- (3) バランス・マットによる体幹強化
- (4) 平行棒による歩行力強化
- (5) 筋肉リラックス(メドマー、ホットバス等)
- (6) シナプソロジー(歩行と他の動作をすることで脳の思考力の強化をする。(例として歩行・足踏みと計算の組み合わせ))



(リカンベント)



(バイク)



(メドマー)

- (7) 脚力強化とは直接関係のなさそうに思われる、口の中の機能強化のレッスンもうけている。(舌の筋肉強化、咳払い、水の安全な飲み方等) 以上のプログラムを週4回(3時間) こなし体力

特に脚力強化につとめています。道のりは長いですが、海外旅行を夢見てたゆまぬ努力を続けております。

(渡嶋 八洲夫)

(B章) シナプソロジー

今までのレポートを通じてリハビリや運動の重要性について改めてお気づきになられたのではないのでしょうか。シナプソロジー(脳トレ)のインストラクターをしております斎藤から脳のトレーニングの必要性についても付け加えさせていただきますとおもいます。

シナプソロジーとは脳の混乱を楽しむプログラムで、認知機能を高めることを目的とした機能訓練です。

介護施設や介護予防で高齢者にむけて活用されているだけでなく、一般企業やアスリート、教育の現場でも採用されています。

現在 私は地域のカルチャーセンターで講座のお手伝いをしたり、自分の体操教室でのウォームアップにも活用しています。

シナプソロジーのプログラムでは「2つのことを同時にする」「左右で違う動きをする」といった普段慣れない動きで脳を適度に混乱させ、さらに効果的な刺激を与えることで脳の機能が高められると考えられます。

シナプソロジーを行った後は感情や意欲のスイッチがON状態になり、会話や行動、反応に大きな変化が現れることをインストラクターとして目のあたりにする機会が多く、脳の活性化の重要性を実感しています。

最近、運動をしている中高年代の方がふえているのは大変素晴らしいことですが、身体だけでなく【脳のトレーニング】も年齢を重ねるほどに必要なのでは思っております。【運動】と【脳トレ】は健康寿命を延ばすための両輪。

身体も脳もますます磨きをかけて元気に過ごしましょう。

(斎藤 秀子)



5. 「これ、何と言うの？」

小さなモノの名前

松永 和子

「世の中に雑草という草はない」という植物学者、牧野富太郎の言葉がかつて昭和天皇が引用されて言われたように、雑草と呼ばれる草にもすべて名前がついています。植物だけでなく、どんな小さなモノにも名前がついているものですね。身の回りのもので、「アレ、アレ」とか「これ、何と言うの？」とか日頃の会話に出てくるものはありませんか？

今回はそんなモノたちの名前を紹介しましょう。以前この「りらいぶジャーナル」紙にエッセイを転載していたフリージャーナリスト、國米家己三さんが主宰する「草乃会」の資料の中から抜粋、加筆しました。草乃会は「半導体問題」「新しい国防問題」から「日本のサービス業」「アイヌ」「万引きの話」まで幅広いテーマで月に1回開催する談話サロンです。

さて、イラストのモノたちの名前は何？

① バッグ・クロージャー 通常「食パンの袋を留めるやつ」と呼ばれています。アメリカのクイック・ロック社の創業者であるフロイド・ハクストンが発明した製品で、リンゴ農園主から「リンゴを入れる袋の口を留めるものはないか」と相談されたのがきっかけで生まれたものです。日本ではすべてを1社が生産していて、国内で1年間に30億個も作られているそうです。このバッグ・クロージャーを捨てずにコードの整理やテープの目印にしたり、半分に切って柑橘類の皮をむくのに使ったり、いろいろな再利用法があるようです。



② ドラキュラマット 効果があるパルプ不織布です。1984年食品包装資材を扱う(株)三和コーポレーションによりドラキュラが血を吸うという発想で命名されたもの。一般には「ドリップ(吸水)シート」と呼ばれています。

肉や魚の吸水、抗菌の



③ ソッパス(ソクパス) の小さなクリップ。広げるとコンパスに似ていることから、この名が付けられました。国内で製造しているのは奈良県の大和鶴金属工業のみで、ソッパスをつけるのは手作業だそうです。

靴下を留めるため



④ モダン メガネのつるの部分はテンプルと言いますが、その先端の耳にかける部分は「モダン」という名称です。デザインに大きな影響は与えませんが、メガネをかけた時に負担を軽くする役割があり、かけ心地を左右する大切なパーツです。



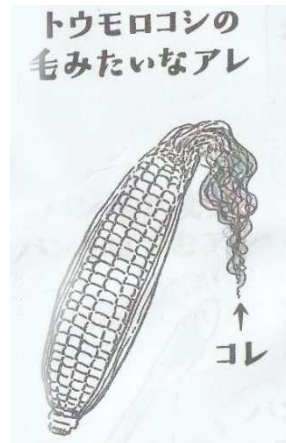
⑤ シュガースポット バナナに茶色い斑点がでてくると、糖度が増えて甘くなっていることが分かるので、シュガー(甘い)スポット(目印)の名前がついたといわれています。このバナナを食べると特に免疫効果が高くなるといわれ、シュガースポットの少ないバナナと比べると免疫増強効果が8倍も違うそうですよ。



⑥ 絹糸(けんし) とうもろこしのひげはめしべにあたり、糸のように細く伸びて、絹のようにつやがあることから「絹糸」と呼ばれています。茎の先端にあるおしべから放たれた花粉をめし



ベが受粉することで、粒を实らせます。ですから絹糸と粒の数は同じ、およそ600粒だそうです。この絹糸にはカリウム、食物繊維、鉄分など豊富な栄養素があり、古くから生薬として利用されてきたとか。天日干しして作る「ひげ茶」はむくみの解消、血圧降下作用、デトックス効果などがあるので、捨てるのはもったいないですね。



以上、何か話のネタにでもしていただければうれしいです。

6. チャンディダサの日々⑤
大漁に沸き返った浜辺
“Prisoner of the charm of Bali”
黒部 正也

小さな人声で眼が覚めた。バリ島チャンディダサの民宿、サリ・ホームステイの一号室は、浜辺に面した広い椰子の樹の庭の東側の端にある。隣のホテルとの間に、表通りから浜辺に続く幅一メートル半位の狭い路地があり、人声はそのあたりから洩れてきた。

枕元の目覚まし時計を見ると、四時前だ。

「船出だ！」

と、私は直感しむっくり起きた。腰にバリ風のサロンを巻いて、頭上にヘッドランプを付けると、民宿を出て彼らの後を追った。辺りはまだ真っ暗。ランプの光に、腰にサロンを巻いた漁師が六人、両側に竹のフロートを付けた小船、ジュクンを海に担ぎ出す光景が闇の中に浮かんだ。

二〇〇三年三月、バリ島で民宿暮らしを始めて四年目のある日の未明のことである。

浜辺と船置き場の間は一メートルの段差がある。漁師たちは、大きな椰子の葉を敷くと、ジュクンを慎重にずらせて海に浮かべた。四艘のジュクンにそれぞれヤマハのエンジンを取り付けると、顔なじみの青年が

「舳先の海面をヘッドライトで照らして！」

と、私に灯りの方向を指示した。六人の漁師は腰まで浸かってジュクンを静かに堤防の先まで押し出すと、四艘のチャンディダサの漁船は一斉にエンジンを響かせ暗闇の海に消えて行った。ロンボク海峡の漁場で十時まで漁をすると言う。

浜辺の夜空を見上げると、新月の空は月明かりが無く、天の川が向かいのレンボンガン島へ南北に大きな橋を渡して、満天の星空を飾っている。南の方向に南十字星が瞬いた。

部屋に戻って、一寝入りをした。7時過ぎに起きて顔をあらってから、思い切ってマンディ（沐浴）をした。この宿は、半屋外の庭に赤いプラスチックの水瓶を置き、水道水を貯めている。白い小型の水桶を使って、頭上に水を一気にかける。びっくりするほど冷たいが、赤道直下のマンディは心地よい。この宿は温水が無いことを逆に売り物にしている。

隣のバンガロウの客はオランダ、ハーグの王宮近くに住む老夫婦であるが、大声をあげながら沐浴を楽しんでいた。

沐浴を終えて、テラスで朝食を摂っていると、椰子の樹の間から、浜辺にジュクンの帆先が見えた。早朝に見送ったジュクンが帰ってきたらしい。時計を見ると、八時四十分。帰りは十時頃と言っていたのに、と私は訝りながら浜辺に出て驚いた。

堤防にトンコール（小ガツオの一種）が山のようになり、囲んだ村人の笑顔と歓声が沸いていた。子供や犬までが忙しそうにその周りを駆け回っている。

ざっと数えて一山二百匹の小山が堤防上に四つ出来上がっている。いずれも二十五センチぐらいの大きさであるが、中には四十センチ以上の大物もある。

黒いプラスチックの桶を持った女性が大勢現われた。トンコールを真剣な眼差しで数えながら桶に並べている。顔見知りの青年の若い奥さんが



、桶一杯に入れたトンコールに手をやりながら、傍らで腕組みしながら立っていた青年に、特別の笑顔で話していた。

「ジャリン（漁網）で捕ったよ。明日も船出をヘッドライトで照らして！ 縁起が良いよ、また大漁だ！」

と、青年は赤銅色の顔を一杯に広げて笑いながら私に言った。

テラスへ戻ると、隣のハーグから来た住人夫婦が挨拶にきた。私とほぼ同年輩で私と同じ、上半身裸である。奥さんは一枚のブルーのサロンで身体を被っている。写真を二枚テーブルに置いた。家の前を黒塗りの馬車が走っている光景が写っている。

「毎朝王室の馬車が訓練に走るのよ」

と、奥さんは自慢した。

もう一枚は、瀟洒な屋内の写真。小型の柵にクリスマスの電飾が輝いている。

「今年のクリスマスの写真です」

と夫も少し自慢した。私はテーブルに大きなスケッチを数枚広げた。

「まあ、絵描きさんですか？」

と、奥さんは目を丸めた。

夫妻はこの民宿の野趣が好きで、毎年数日冷水の沐浴を楽しみ、あとはウブドの高級ビラで半月過ごすという。

十時になった。モデル希望の男女三人が今日も顔を揃えた。

民宿の管理人兼運転手の奥さん、カレさんにはバリのお祭り衣装を着てもらって十分間の四ポーズ。その息子さんには、腰に茶色のバティック（ジャワ更紗）を巻いて四十分。常連のニョマンにはいろいろなポーズで一時間写生をした。休憩を入れて三時間あっという間に午後一時になった。

裏庭に出て、赤い大きな水瓶の冷水を白い手桶で掬い、頭上にかける。火照った身体に水の冷たさが快い。流れ落ちた水は黒い玉砂利の上で弾けた。 浜辺では大漁の余韻が残っていた。

ジユクン（バリ島の漁船）の陸揚げ



トンコール（小カツオ）の大漁



チャンディダサの民宿のテラス





7. チャンディダサの日々⑥

ナディさんのカウベル

“Prisoner of the charm of Bali”

黒部 正也

2017年11月27日の夕刊を見て驚いた。バリ島のアグン山の噴火でバリ国際空港閉鎖のニュースが報じられていた。

とっさにナディさんの困惑した表情が浮かんだ。彼はバリ島の聖なる山アグン山に近いバリ島北部の、鄙びたリゾートの民宿「サリ・ホームステイ」の管理人兼運転手である。オーナー夫妻は、年間半分はドイツへ帰る。その間、彼は妻のカレさんと民宿を切り盛りしている。

最初に出会った2000年6月、ナディさんは40歳。普段は上半身裸で、青い半ズボンを穿いている。陽気な性格で、鍛えた胸元をポンと叩いて自慢していた。

海辺の広い椰子の林の中に、大小6棟の茅葺のバンガロウがある。私は2階建ての一番大きなバンガロウを借りて、2階をアトリエとして使っている。物置小屋を物色して、大きな竹籠、鹿の置物、草刈り鎌などを借りてアトリエへ運んでもらった。彼はすかさず緑の椰子の葉、真っ赤なハイビスカス、ピンクやオレンジ色のブーゲンビリアの花々を飾って即席アトリエを熱帯の花園に変えてくれた。彼は大工仕事も堪能で、あっという間に画架（絵描き台）も作ってくれた。

その年のある日の午後、私は一階のテラスの寝椅子で昼寝をしていた。辺りは急に暗くなったと思ったら、雷鳴が轟いた。上半身裸のナディさんが駆けつけ、無言でテラス三方向を囲む大きな竹の簾を下ろし、テラスの電灯を点けた。私は強い眠気に身を委ね、そのまま目を閉じていた。その直後、強い風雨がテラスの簾を叩いたが、私は安心して昼寝を貪っていた。

陽気なナディさんにも子を持つ親の心配事があった。長男のワヤンさんは、ドイツ人の民宿のオーナーと相性が悪く、大喧嘩の挙句、民宿の庭師の仕事を辞めて、オーストラリアの牧場へ出稼ぎに出た、という。ところが、

「友人に誘われて牧場で2年間働きましたが、給

料は予想の半分でした」

と、ワヤンさんは私のクロッキーのモデルのポーズを

しながら、ぼつりとぼやいた。

今はヘアサロンに働く可愛い小柄な女性と結婚して、二人の女子のパパである。

ある日の朝、私は民宿の向かいのスーパーヘヤクルトを買いに出掛けた。

「クロベさん！」

と、スーパーの駐車場の車から大声で呼ばれた。運転席にナディさんの笑顔があった。真っ白いお祭りシャツ、頭上に真っ白いお祭り用の布の巻き帽子“ウドゥン”を着用している。

「ブサキ寺院のウパチャラへ行ってきます！」

と、笑顔で言った。

ウパチャラとは、お寺のお祭り。傍らに頭上に黄色の花飾りを付けたナディさんの妻、大柄なカレさん、長男夫妻、次男夫妻、そして孫3人。後部の座席には果物や花飾りなどの供物が一杯積み込まれている。まるで一家でピクニックへ出掛けるような楽しさ一杯を乗せた黒いワゴンが、アグン山の麓へ向かった。

アグン山の麓にあるブサキ寺院は、バリ・ヒンドゥ教の総本山。ナディさん一家は、敬虔な信者である。

その夜、ナディさんの妻カレさんが私を呼びに来た。お供えの豚料理をナディさんの部屋で振舞ってくれた。豚の丸焼き料理“バビ・グリーン”鶏とヤギの串焼き“サテ”野菜料理の大皿が床一面に並ぶ。

私は皆さんに習って、左手に油紙の皿を手にして、右手で鰯を摘まむようにして食べた。ナディさん一家の大勢の笑顔に囲まれて頂く手料理は、暖かさに包まれて格別に美味しかった。

2013年5月のある日、茅葺のバンガロウのテラスで昼寝をしている。遠くで“カラン、コロン”と、牛の首に下げたカウベルの乾いた音がした。最初の出会いから14年も経ってしまった。

寝椅子に起き上がって眺めると、ナディさんが赤毛の仔牛を曳いて椰子の林の間を歩いている。午後のオレンジ色の陽が斜めに射して、紫色の椰子の葉影を背景に、仔牛と人が逆光に浮彫のように見えた。絵になる！と私は手元のスケッチブックを持って駆け寄った。



ナディさんに頼んで、仔牛を曳きながら椰子の林を行き来してもらった。

「おいちゃん！」

と、海辺から女の子の声がした。ピンクの水着を着た子供が二人、ナディさんに駆け寄った。その後ろに大柄な黒い水着を着たナディさん夫人が、赤い浮袋二つとサンダル二つを手に微笑んでいる。

二人の孫を抱きかかえた彼の穏やかな笑顔は変わらないが、自慢の身体は腹が出て青いズボンがずり落ちそうになっている。びんたに白いものが混じっている。彼も50歳を超えた。立派なおじいさんになった。

「チャンディダサでお世話になるのは、多分今年が最後でしょう」

と、私は手短に15年間のお礼とお別れを告げた。「嘘でしょう！」

と、彼は奥さんと曇らせた顔を見合わせながら言った。

チャンディダサを去る前の晩、テラスで寛いでいた。暗闇の中から乾いたカウベルの音が聞こえた。

「???」

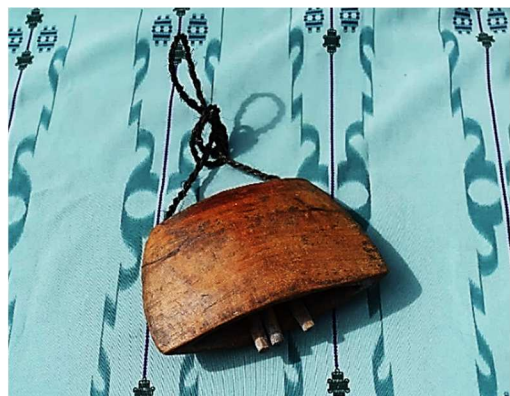
こんな夜更けに、何だろうと訝りながら庭先を見た。ナディさんが両手に木彫りのカウベルを二つ持って立っている。後ろにいつもと違った悲しそうな表情のカレさんの顔がある。

「急いで手作りしました！」

と、彼は涙をこらえながら私に手渡した。

「カラン、コロン」とまた鳴った。

ナディさんの手作りカウベル



バリ島の昼下がり F20 2017



ブルビチャラ（会話） F40 2019





8. 団体走行は効果的？

会員 鳥居 雄司

古いままの理解

この大会は7月開催、気温16度、曇の釧路です。釧路と言うと根釧原野で晴が少なく霧が多く夏でも寒い日があり、作物栽培にはあまり適していないが漁業が盛んな地方という印象があります。この印象は高校の地理で身につきましたが、古い理解のようです。念のために「根釧原野」をネット検索すると「根釧原野は未開発時代のこの地域一帯に与えられた呼称」だそうです。半世紀以上前の理解です。きっと、他にも未更新のまま身に付けているものか？と思いました。

開けた景色です

会場は鶴居村(釧路湿原国立公園)を見ることができ、自然環境が豊富。球技場を発着点にしています。村の名前からわかる通り、鶴の越冬地です。一部の鶴は冬があけてもシベリアに帰らず居ついているので、探せば年中、季節を問わずに鶴を見ることができます。釧路湿原はかつての海が砂や泥で埋まってできたところ。鶴居村は国立公園内より乾燥していますが村の中心部から湿原に近づくコースでは乾燥しきってない軟弱地盤です。うっそうとした林でなく、部分的に木々があったり、草の堆積で地盤がゆるかったり、草の間を小さな流れがあったりを含んだコースになっています。また、湿原の周辺部で丘が連なっている部分で、景色を楽しめるコースです。

最近のエンデュランス大会は走りの高速化で、走行制限時間が短くなり、ゆっくり景色を楽しむ時間は減っています。私は外乗(馬に乗って高い視点から周囲の景色を楽しむ乗馬)の延長で大会に参加しています。



馬場か障害か

馬場と障害の違いの一つに体重のかけ方があります。馬場では鞍にしっかり体重を乗せろとい

馬場、障害、エンデュランスの比較

	馬場	障害	エンデュランス
競技時間	数分	数分	走行距離により40kmで4時間、今年の100km(全日本)で10時間
服装	白いキュロット(パンツ)、赤や青の鮮やかなジャケット、手入れの良い長靴に拍車、鞭	白いキュロット(パンツ)、赤や青の鮮やかなジャケット、手入れの良い長靴に拍車、鞭	上着は選手により様々、長靴ではなくブーツ、作業靴、スポーツシューズなど下馬して不整地で馬を引ける履物
装備	革製の磨き上げられた鞍、革製の頭絡(馬の口にはさんで制御するハミと手綱を結ぶ平らなひも)、アブミ(足を乗せる)と鞍をつなぐ革製のベルト	革製の磨き上げられた鞍、革製の頭絡(馬の口にはさんで制御するハミと手綱を結ぶ平らなひも)、アブミ(足を乗せる)と鞍をつなぐ革製のベルト	ビニール製の軽い鞍、ビニール製の頭絡、同じくビニール製のベルト
装備の手入れ	使い込む程に体になじみ、手入れが光沢につながる	使い込む程に体になじみ、手入れが光沢につながる	使用後に水につけてバシャバシャと汚れをおとして
鞍の価格	70万円前後	70万円前後	6万円程度

われ、障害ではアブミに体重を乗せろと言われます。種目の違いにあわせて、それぞれの理由があります。エンデュランスは馬場と障害両方の要素があると考えて、私はどちらも練習しています。初心の時は馬場から入り、しばらくすると馬場か障害に分かれます。その後はどちらかに特化する人が多い傾向があります。

なじみの薄いエンデュランス

エンデュランス大会は馬の健康を重視しているので、健康を損なう扱いは禁止されています。乗馬で多く見られるムチや拍車は使えません。それで走りを促すために靴で蹴ったり、掛け声をかけたりします。馬の健康状態は獣医による検査で確認して、検査の評価四段階の下位になる項目が



あると失権して競技から除外されます。検査項目は13程あり、筋肉、腸音、血管、歩様(足の運び)、前進氣勢(馬が進みたい気持ちを表す様子)、1分間の心拍数(64拍/分以下)などがあります。獣医検査は競争の前後に加えて、走行距離を複数の区間(一つの区間は40km未満)に分けるときは区間の走行毎にあります。それで今回参加する40kmの場合は、獣医検査⇒1区間走行⇒獣医検査⇒2区間走行⇒獣医検査になり、3回の獣医検査を受けます。馬の健康を保った状態で長距離走行の速さを競うのがこの競技の特徴です。馬の健康を保ちながら速さを競うので、最後の獣医検査を終えて失権せずに完走して順位が決まります。馬の状態を観ながら走行し、早く到着しても獣医検査を無事に通るまでは終わりません。検査後に「完走」と告げられた時のうれしさを味わえるのがこの競技の魅力です。さらに成績上位者で獣医検査結果の良い騎乗者1名に「ベストコンディション賞」が与えられ、表彰式で最も大きな拍手で祝福されます。

今回の40kmは

40kmは、同じ牧場から4名が参加します。大会の出発は最も気をつかう場面です。いつもと違う雰囲気を感じとって馬は緊張して落ち着きません。人も同じです。出発時間と同時に一斉に出発すると馬の不安定な動きで落馬することが多い場面です。4名のなかに出場経験の浅い参加者がいるので出発時間(5:30)より間をあけることにします。競技規則で、出発時間後15分以内に走り出せば良いので、4名は時間を空けて他の馬が出て、姿が見えなくなってから出発しました。出発後は川沿いに少し進んで小川を渡ります。常歩で歩いて渡ろうと考えましたが、馬の向きが川に直角になり、飛び越えました。思わずバランスを崩しましたが、落馬せずにそのまま進みました。このコースは幅の狭い小川を渡る所が数箇所あり、そこで落馬する選手が少なくありません。常歩で渡らせるには、川にゆっくり近づき、斜めに渡る向きでそろりと川を渡る方法があります。私の場合は馬が飛ぶときに備えて障害の練習もしています。



1区間(20km)は1時間54分で走破して、予定(2時間10分)より早く、心拍数も48拍/分で馬に負担をかけることなく終わりました。2区間(20km)を出発すると1区間と同じ場所で川を飛びこえます。川沿いから山の急な登りになると1頭の動きが緩慢になり遅くなってきました。1頭単独だと止まるような歩みです。4頭が一緒なので遅いなりに進みます。そのうちに後ろからきた他の牧場の2頭に追い越されました。馬は集団で動く習性があるので私たちを追い越した馬を追走して速度を増すことができました。それで、馬を止めることなく予定時間(2時間30分)より早く1時間51分で到着できました。獣医検査では歩様(足の運び)がC評価でしたが、心拍数は44拍/分で馬に負担を大きくかけずに完走できました。

今大会では4頭が固まって走行したので、馬から降りて綱(馬が動かない場合に備えて引綱を持参)で引くことなく順調に走り終えることができました。



9. 7年間務めた事務局を振り返って

会員 島村 晴雄

R & I 第8期途中(2015年6月～)から、前任の事務局長・豊口さんから事務局業務を引き継ぎ、第15期末(2022年8月末)迄、約7年間事務局を努めて参りましたが、豊口さんがR & Iに復帰され、事務局作業として一番負荷の高い“りらいぶ”ジャーナルの編集・発行を再度担当していただけることになり、また自身の“りらいぶ”生活を再発見したいこともあり、事務局を退任し、R & Iの一会員に戻させていただきました。

当方が入会したのは、R & I 第3期途中の2010年春ですが、事務局担当になる前まではロングステイを中心に会員として日々を楽しんで来ました。第8期途中から事務局担当となり“りらいぶ”ジャーナルの発行(寄稿依頼、編集・印刷依頼、印刷物袋詰め・郵送)が早速ありましたが、前任の豊口さんにも引継ぎを兼ねて手伝っていただき、早速事務局作業の大変さを身に染みて理解出来た次第です。

第9期に入り、第8期の法人住民税(年間14万円)を納める手続きをしましたが、R & IはNPO法人なのに何故毎年法人住民税を納めているのかに疑問を抱き、調べていくと2007年にNPO法人を設立した時のR & I定款に、収益事業を行っていくことが書いてあり、将来的に収益法人したい思いがあったようです。当方が入会した頃には、既に収益法人にする動きがなかったにも関わらず、何方も疑問を持たずに毎年法人住民税(年間14万円)を納めて来た事実がありました。これでは毎年各位から集めた会費が無駄使いになっているのではと感じ、2015年12月に芝税務署へ収益事業廃止届出書を過去5年遡って適用していただく手続きし、ある程度認められて第9期に合計で約28万円(東京都は過去3年+α、大阪府&大阪市は僅かな還付)の法人住民税還付を受けました。

処で話は変わりますが、会員の皆様も無駄な経費等を払い続けたりしていないでしょうか、少し

は苦勞しますが自身で積極的に調べたり、動いたりすれば、大きな節約が出来ます。最近生活必需品等の値上げラッシュで月の家計収支がマイナスになって来ている方々も多いようです。例えば皆様がお使いの携帯電話や携帯スマホの利用料金等は、経費見直しの最たるものです。当方の携帯スマホの1ヶ月利用料金は、月平均で約1,500円弱です。年間での経費見直しは、法人や個人にとっても重要課題です。

その後も事務局として相変わらず毎回の“りらいぶ”ジャーナルの編集・印刷発行・郵送作業の大変さは続きましたが、事務局としての一大イベントとして第11期の2017年11月にR & I関係各位の皆様、R & I会員各位の皆様のご協力のもと、R & I 10周年記念誌を発行させていただきました。ただ皆様のご協力のもととは書きましたが、皆様からご寄稿はいただきましたが、記念誌のデザインや構成等でのご協力は無く、すべて一人で行ったこともあり、作成に時間が掛かり、内容的にご不満の方々も多かったかと思いますが、当方にとっても事務局としての最大の成果であったと思っております。

また毎年4回の“りらいぶ”ジャーナルの編集・印刷発行・郵送作業を事務局の主な業務として、コロナ禍の第13期末(2020年8月)までの“りらいぶ”ジャーナルは、アナログ印刷ベースでの発行としていましたが、第14期(2020年9月～)からは、コロナ禍の影響、経費節約や事務局作業軽減の目的で、デジタル版“りらいぶ”ジャーナルの発行とさせていただきました。R & I会員や関連各位の多くの方々が後期高齢者になっているにも関わらず、直接ご覧になるには大変なデジタル版“りらいぶ”ジャーナルにさせていただきます、大変申し訳無く思っております。

さて2020年のコロナ禍の影響もあり、非接触型の業務対応への見直しが進んでいますが、対面方式の毎月のR & I 東京地区運営会議は2020年7月以降オンライン会議(Zoom利用)となりました。オンライン会議では関連する会員各位の通信費や設備費に多少費用は掛かりますが、対面方式のリアル会議では移動するための交通費や移動時間等の大きな費用削減となり、コロナ禍が収束しても引き続きオンライン会議が



主流になるかと思います。

コロナ禍のこんな流れもあり、第14期（2020年9月～）以降はR&I会員年会費も大幅に見直し削減しましたが、理事長のご判断もあり、今期第16期（2022年9月～）からは、何とR&I会員年会費はゼロとなり、R&Iの必要経費は寄付金、銀行預金残、入会金等で賄っていくこととなりました。

今振り返ると、当方が約7年間担当した事務局は、経費節約（2019年11月から事務局手当廃止も含む）の歴史であったのかと思います。まだまだ削減出来る経費や事務局作業は残っていると思いますが、その課題は次の事務局に期待したいと思います。

終わりに私事ですが、長きにわたり皆様からのご支援やご協力に深く感謝致します。

10. 『アイヴィン達が君のことを平均的カナダ人より上だ。』と言うので。

会員 赤神 潔

ニルセン農場はヴァンクーヴァー市の郊外にあった。比較的BC州の中では、気候温暖で人口密度の高い南部に位置し、米国のワシントン州に国境を接する所で、5 エーカー、10 エーカーの、なだらかな起伏のある牧場が散在しており、彼らのランチ（飼育場）は砂地で水はけの良い平らな10 エーカーであった。新築中の家が夏には完成する予定で、それまで、毛皮乾燥室の横のヘルパー用の小さなワン・ベッド・ルームに入ることになった。ニルセン夫妻は我々の到着をたいそう喜んでくれて、色々と気を使ってくれた。カナダに来てその夜から、子供たちの踝から脹ら脛にかけて何かに噛まれ出した。経験のない我々には、蚤かダニか見分けがつかなかった。少し遅れて2日目から、私達大人も次々同じように噛まれ始めた。ニルセン夫妻に聞いて見ると、「小さな蜘蛛は沢山いるが、蚤やダニはいない。今まで、1度も聞いたことがない」と言った。彼らにもアンマリーと言う、13歳のブロンドのきれいな肌の女の子が1人いたが、「アンマリーも、蚤やダニには今まで噛まれたことがない」ともってもら

しい。仕方がないので、その夜、殺虫剤を買いに行き、ひょっとして蜘蛛かなと思いながら、部屋中至る所に撒いた。3日目の朝、掃除機で部屋の隅々を掃除してゴミを集め、何か虫の死骸がないか調べて見ると、蚤の死骸が沢山あった。多分、彼らは噛まれても、蚤の唾液にある酵素に対して免疫性がある、かゆくもないし、噛み跡も目立たないのだろうと思った。富美子が「トイレが臭くて気持ちが悪い」と言うと、奥さんが来て、きれいに掃除してくれた。

アイヴィンとミンクの餌のやり方に付いて検討した。当時、BC地方では、秋の終わりから春にかけて、種ミンクの交尾、妊娠、小ミンクが産まれて、ある程度大きく育ち、離乳するまでの約6ヶ月間は、200kgほど入る手押し車に餌を入れて、小屋の中を静かに忍び足で押し、各々のミンクの体調を考えながら音を立てず時間を掛けて、大きなスプーンで、1籠ずつ丁寧に餌をやるのが一般的であった。ミンク飼育者業界誌のユーエス・ファー・ランチャーでも、この時期は“マン・ウイズ・スプーン”（手にスプーンを持つ男）を勧めているようだった。

夏から秋に掛けて餌を充分食べたミンクは、厳しい冬を生き抜くために、体脂肪という形でエネルギーを体に蓄え、秋から春に掛けて、近くにきれいな飲み水さえあれば、10日や半月位は吹雪が続いても平気で、生きて行けるのである。この時期に、野生のミンクのように餌の摂取量を我々が意識的に制限しないと、養殖ミンクは餌を食べ過ぎてしまい、太り過ぎて春に正常な発情が来ない。交尾が終わってからも、無闇に餌をやってしまうと太り過ぎて難産になり出産率が落ちる。出産後も子ミンクの数によって親の餌の要求料が異なるのである。つまり、この時期のメス親の理想的な体調、体型がミンク・ビジネスの勝負ということになる。

しかし、私は普段、ガソリン・エンジン付き、又は電動の給餌機で餌をやっている、あまり気にしないで、変更し無い方が良く提案した。私がガソリン・エンジン付きの給餌機で餌をやった直ぐ1メートル位後を、いつもアイヴィンは、大きなミンク・スプーンを持って、極度に緊張した様子で付いて来た。その夜も、まだ半信半疑で、それでも、「ジミーが言うように、1年中給餌機が使えるとすると、もっと沢山ミンクが飼えるかも知



れない」と、少し興奮気味だった。

ミンクの出産中も授乳期間中も、私は給餌機を使い続けた。大部分の親ミンクは出産後も普段と変わらず、冷静であったが、僅かではあるが、中には初め給餌機の音が近付くと、自分の子ミンクを1匹口にくわえて、残りの子ミンクを巣箱に残し、籠の中を激しく走り回るものや、子ミンクを全て巣箱から外の籠の床の上に放り出し、自分だけ巣箱の中の巣草の下に隠れるものがあった。そのとき子ミンクは、死んだふりをして動かなかった。私の後を忍び足で付いて来ていたアイヴィンは、頭が破裂する程心配しているようだったが、全ての親ミンクは、餌を満腹食べた後、子供を抱え直して満足そうだった。日が経つにつれてアイヴィンが落ち着いて来て、「神経質な親は何時も同じように大騒ぎをするが、別段授乳が止まる様子もなく、やっぱりジミーが正しかった」と言い出した。

エンジンの騒音が、ミンクに与える影響も気になるかも知れないが、我々が、それを気にするのは、我々の勝手な思い込みや先入観がそうさせるのである。ミンクの体調や体型を判断する際、スプーンを持って手押し車を押し、忍び足で近付いて、1頭1頭時間をかけて巣箱から追い出して観察し、1頭ずつ時間を掛けて(自分流の憶測と迷いを繰り返して)判断を下して、丁寧にきちんと丸く綺麗に餌をやるのと、1方、いつもの様にエンジンの騒音を立てて給餌機で近付いた時、餌が貰えるか貰えないか少し緊張して、自分から巣箱を飛び出してくるミンクの体調や体型を、何分の1秒かの瞬時に、私情抜きで冷静に判断して、瞬時に餌をやるのとの違いは、丁寧と乱暴と言えるかも知れない。しかし私は、熟練して来ると後者の方が、ミンクが手前のケージに手をかけて、立ち上がって、我々を見た瞬間の腹のくぼみだけに集中して、前後のミンクを数匹同時に比較出来て、全体として早くてむらのない、ユニフォームな冷静な判断が下せ、短時間で、能率良くて、ビジネス・ライクだと思った。私達は、ペットを飼うために日本からわざわざカナダへ来たのではないのだから。アイヴィンは、どちらかという、ミンク飼育を純粋にビジネスと割り切っているタイプで、余り良いミンクを良いミンクをと、自分流の憶測の飼育法にこだわる結果、無闇に不必要な手間を掛け過ぎ、飼育数が少な過ぎて、出荷の際、ろくに自

分1人でバンドル(同じ質、同じサイズの毛皮の束)も組めない小規模なランチャー達とは違い、新しいことを試して見る勇気を持っていた。

このことはその後の、私達のミンク・ビジネスに大きく影響することになった。

餌屋のスタン・シーヴスのランチは220ストゥリートを挟んで、アイヴィンのランチのほぼ筋向かいにあった。当時、ミンクを飼うのを止めて、白人ヘルパー2人を使い、細々と、回りのミンク飼育者に魚とチキンの副産物を50パウンドずつの紙袋に入れて冷凍し、40ずつパレットに積み替え、トン単位で売っていた。私がアイヴィンの農場で働き出した時も、ミンクの種付けの終わりが近付いて、未交尾のミンクが少なくなり、少し暇になった頃、スタンの飼料調理場から毎日のようにトラックが来た。私達は凍った魚かチキンのブロック(餌の塊)を1個ずつ、肩に担いで、300トン入る冷凍庫の中の高さ14フィートの天井まで、ぎっしりと積み上げた。当時、スタンやダン・バイルのような餌屋以外、ミンク飼育者は誰もフォークリフトを持っていなかったようだ。

ある時、アイヴィンが冷凍の洗浄したチキン副産物を45フィートの冷凍コンテナでカリフォルニア(米国)から買ったが、運んで来たトラックがカナダ国内を走れるライセンスを持っていなかったため、カナダ国境で止められてしまった。仕方なく私達はスタンのダンブ・トラックを1台借り、国境までそのチキンを取りに行った。国境は車で15分程の所にあったが、アイヴィンと2人で、1旦、コンテナからダンブ・トラックに手で積み替えて農場に帰り、フリーザーに再び手で積み上げなければならなかった。コンテナには50パウンドずつのブロックが1200個あり、冷凍品の温度上昇はその品質に致命的で、気が焦った。日本とは違い、コンテナもダンブ・トラックも床までアルミニウムで出来ていて、臨海地の空気中の水分が露になってアルミニウムの床が濡れ、滑りやすくなり、紙袋入りの凍ったチキンにも、真っ白に霜が付いて滑りやすくなった。私は、何度か往復した時、ブロックを2つ持って、足早にコンテナからトラックへ急いでいて、途中滑った。ブロックを直にその場で捨てれば良いのに、持ったまま無理して立ち直った。そのとき腰の背骨がずれ、椎間板ヘルニアになってしまった。



私が必要な書類を作り、アイヴィンにサインして貰って、シアトルのカナダ大使館から永住権を申請した。防衛大学校からの在籍証明書は、大使館から教えられた女性の日系人の翻訳家が近くのマンションに住んでいて、そこへ行って翻訳してもらった。大使館の係の白人の男性が、「ここは、アメリカ人のためのオフィスなので、1 応、今回、君の申請書を受け付けるが、日本人は日本にあるカナダ大使館から応募するのが原則だ」と言った。4 月が来て、私は大きな賭けをすることになった。日本にいれば、良譲は小学校に行く時期になった。このままカナダに留まって、永住権が取れば良いが、もし取れなければ、日本に帰って小学校入学が私の我尽のために、人より 1 年遅れることになる。私には全く将来の予測が立たず、日本の親戚が私を罪人のように非難して、「直ぐ帰って来い」と言い続けた。

ある日、2 台ある給餌機の内、まだ 1 ヶ月程しか使っていないオランダ製のハスカ・ガスエンジン・ミンク給餌機が突然動かなくなった。エンジンはおかしくないが、走行不能になった。私は、その夜、ディファレンシャル・ギアを分解して、小さいギアが丸坊主に摺り減っているのを見つけ、この会社の技術力が分かった。通常、1 組のギアを作るとき、小さいギアの材質を大きいギアより微妙に硬く作るものだと思う。以後、絶対にこの会社の物は買わないことにした。アイヴィンは、あまり機械に強くないようで、私がディファレンシャル・ギアを分解し始める時、少し抵抗した。以後、ファームの機械類は私が管理することになった。

8 月に、アイヴィンとキャレンとアンマリーがノールウェイへ 1 ヶ月間帰って行った。「カナダに 1953 年に来て以来 20 年ばかり、今まで 1 度も家族揃って、ノールウェイへ帰ったことがなかった」そうだった。必ず夫婦のうち 1 人は、農場に残らなければならなかったのだ。3 人とも大層嬉しそうだった。私もうれしかった。

アンマリーが昔通ったことのある、マザー・グース保育所のオーナーがニルセン夫妻の親友であることから、あるとき、「ジミー、良譲と淳子を保育所に入れてはどうか」との提案があった。私が、「我々のヴィザ(査証)がまだ観光ヴィザなので」と渋ると、ミセス・ウィルソンが「正しいヴィザがあろうとなかろうと、子供は時が来れば教育を

受けさせるのが人類共有の責務であるから、私に任せなさい」と言った。以後、私は、毎朝子供達を保育所へ送って行き、午後、向かえに行くことになった。途中で、誰も送ってくれる人のいないインド・キャナディアンの子供もついでに私がピックアップし、ドゥロップ・オフすることになった。午前中午後と、農場で忙しい時に子供の送り迎えをし始めた私は、ニルセン夫妻に申し訳なくて、その分遅くまでミンク場に居残って、色々雑用をしていた。ある日、アイヴィンがそれに気付いて、夕方、私をミンク場まで探しに来て「そんなこと別に気にせず。時間が来ればさっさと切り上げて帰ってよろしい」と言ってくれた。ノールウェイ人のハーヴィーという男がいて、時々アイヴィンを訪ねて来た。働き者で、腕に自信のある大工だったが、小春日和のある日、昼食後、仕事はじめにアイヴィンの家に行くと、昼食時にハーヴィーが訪ねて来ていて、どうした訳か我々の仕事を 1 時間位手伝うことになっていた。アイヴィンが「今からハーヴィーと 3 人でミンク場へ行き、巣箱を繁殖用の籠に付けよう」と言い出し、飼料調理場の道具箱からハンマーと釘、ハグ・リンガー(ハグ・リング締め付け具)とハグ・リング(半円形針金)を取り出して、私達にわたした。彼のミンク小屋は冬季日当たりが良いように、南北に細長く約 50 メートルの長さ x 約 4 メートルの幅で、細長く真ん中に通路があり、種メスの小屋は、東西両側に 1 列ずつミンクの籠が並んでいる。メス用の巣箱は、古いバター・ボックス(12" x 12" x 12" 位の木製のバターの SHIPPING・ボックス)をリサイクルし、前の方に直径 4 インチ程の巣穴をあけ、蓋の部分を 1" x 1" の目盛りの金網にしたもので、小屋の中の籠の前方上方の屋根の下に棚に巣草を詰め込んでしまっている。籠の手前中央、通路側にある小さな 4 インチ角の金網の周りの 3 辺のハグリングを取って、ドアのように開け、その穴に巣箱の丸い巣穴を合わせて、籠の上部手前にあるドアを開け、籠の内側から 2 本の釘を、巣箱に打ち込んで、籠の針金を挟むように曲げ、巣箱を通路側の籠の外に吊って固定すれば良い。

突然、アイヴィンとハーヴィー 2 人が争うように、ミンク小屋の西側の籠の列に巣箱を吊り始めた。それを見て、私はもう 1 方の東側の籠の列に巣箱を 1 人で吊り始めた。アイヴィンもハーヴィーも



予め申し合わせてあったように、猛烈なスピードで競争して西側を吊って行った。何も聞かされていない私は仕方がないので、当然、遅れまいとトップ・ギアで東側を1人で吊りだして、1時間後にピタリと小屋の両側が同時に終了した。仕事には自信のあるアイヴィンと大工のハーヴィーは、1人の私が彼等の2倍の努力をして、正確な仕事をするかどうかに興味があったようだ。

ある日の夜、ニルセン宅で保育所のオーナーの御主人ジョージと会った。彼はCBC放送局のアナウンサー、ジャーナリストで、「ジミー、私は、君を助けたい」とひときわきれいな澄んだ声で、切り出した。彼は移民省の大臣を日頃からよく知っていて、「君をアイヴィンが高く評価しており、『平均的カナダ人より上だ。』と言うから、君のことを大臣に1度話して見たい」と言った。後程、テレビのニュース番組で知ったことだが、当時、カナダの移民局のオフィサーは、特別な権限を持っていたそうだ。

その年(1973年)の12月17日、もう観光ヴィザの延長が次には出来ないだろう、と言われていた数日前、数日早いクリスマス・プレゼントが届いた。家族4人の永住権取得の知らせであった。ジョージが言うには、「シアトルの大使館に提出した君の申請書は、私達が調べた時、ファイリング・キャビネットにファイルされたままで、放置されていた」そうだ。

クローヴァーデールのモーターヴィヒクル・ランチ(車両、運転免許証オフィス)に行って、カナダの自動車免許を取ることにした。当時は、国際免許証が、あまり出回っていなかったもので、2年目でも問題なく使えていたが、1度試験を受けに行ってみた。

直ぐに、その場に居合わせた数人と一緒に、立ったまま机に向かい、筆記試験を受けたが、私が1番早く1度で80%以上とれた。白人の試験官が目丸くしていたが、直ぐに真顔になり、額に皺をよせ、疑わしそうに私をながめ回しはじめて、私の答案用紙を脇に置き、「その椅子に腰掛けて待つよう」と、壁際のベンチを指した。その時、試験を受けたのは私以外の3人の白人男性と、ヨーロッパから来た白人の20代の女性が1人だった。私の後に答案用紙を出した白人男性達が、即座に「パス」と言われて、うれしそうに私を振り返って、次から次へと帰って行った。

1人の女性は何とか英語をしゃべっているのに、筆記試験が出来ず、困っていて、試験官に何度も答案用紙を突き返されて、椅子に座っている私に、自分から「ヨーロッパから来た人が、1人前にカナダ人と伍して、生活して行けるようになるまで、10年位掛かるそうだ」と、気兼ね気味に弁解し乍ら、そのつど、少しずつ試験官から答えを教わっていた。

その時、ヨーロッパの白人に10年かかるとすると、日本人が1人前に此处でカナダ人と伍して行けるには何年掛かるかなと、真剣に考えた。私は、後に彼女がパスと言われて、その後おもむろに「オーケー、お前もパスだ」とあごを突き出して、不機嫌に言われるまで、1時間程椅子に座って、ただ待たされたことを覚えている。

その時、椅子に腰掛けて、思い出していたことがあった。昔、大阪の豊中市の第4中学校にかよっていた時、「アメリカへ1年間程、交換留学で行った」と言う、裕福そうな若い女性の英語の先生が着任して来たことがある。毎日、洋服を着替えて来て、2度と同じ洋服を着て来なかったことが生徒の中で評判になった。私はその先生のファンになって、家で『グッド』の代わりに、先生のように、『グー(good)』を連発した。それを聞いて、面倒を見てくれていた、阪大有機化学出のインテリの長兄が、その先生のことをちゃかして、「潔、そのような人を我々は、『アメション』と呼ぶのだ」と言った。「えっ!『アメション』って、どういう意味?」と驚いて聞くと、「彼女のように、ほんのわずかにアメリカへ行って来て、'シオンベンする程の短時間しか行っていない人'なのに、あたかもアメリカを全て知っているように振る舞う人のことを言うのだ。余りかぶれると、お前も他人に安く見られるから、注意しろ!」と、言われた。

その当時は、そう言った長兄をむしろ良くは思わなかったが、クローヴァーデールのモーターヴィヒクル・ランチで待たされながら、やはり、あれは長兄が正しくて、あの先生は『アメション』であったのかなと思った。『カナダ人と伍して生活していけるには、ヨーロッパ出身の白人の女性でも10年掛かるとは!』多分、猿真似の上手な我々日本人はカナダ人のような'振り'又は'真似'は簡単に出来るし、その猿真似を短時間で、自分のものにしてしまう能力も兼ね備えてはいるようではある。しかし、所詮、周りのカナダ人



がどの程度それを容認してくれるかどうかは、相手の資質が決めることで、‘カナダ人と伍する’程度の度合いにも色々ある。1人よがりを通り越して、自他ともに真に‘伍する’には、10年位掛かって、我々日本人は簡単に成れないだろう。我々日本人の移住者が増えて、時間と歴史を経て、カナダの文化、宗教、歴史、人種を完全に消化して我々自体が進化し、全ての基準がすっかり変わらない限り、多分、幾世代も掛かると思っている方が正しいように思えたのである。

次の年、富美子の実父が大阪から我々を訪ねて来て3か月間ほど滞在していた時、夏休みを貰って、中古のテント・トレーラーを100ドルで買い、ウェルズ・グレー国立公園へキャンプに行った。実父は、戦後、南太平洋の孤島で1人生き延び、死んだ部下の下着のパンツだけを身に付けて、栄養失調で視力を失い昼と夜が分からなくなり、海水に浸してふやかした革のベルトをしゃぶっているところを米軍に見つけれ、捕虜になった。回り回って、ウィスコンシン州のマッコイに数年収容されたという経験があり、英語も少し分かった。普段、日本でキャンプなど縁がなかったものだから、子供たちと共にしゃいでくれて、あっという間に別れの時が近付いた。

ある日の昼、私とニルセン夫婦が仕事を終えてミンク・ランチから、昼食にお互いの家まで帰って来ると、実父は、汗びっしょりになって、家の回りにあったスギの木の植え込みの上と横の部分を、勝手に日本流に真っ平らに角を付けて散髪してしまっていた。彼は、岡山で植木を少し触っていたので、本人は自分の腕を自慢するつもりと、ニルセンさんに気を使ってもらったお礼のつもりだった。当然喜んでもらえるものと信じて、朝から必死で頑張った積もりだったのだが、晴天の霹靂の如く、それを全く理解出来ないニルセン夫婦の激怒と大失望を買ってしまった。「せっかくのゴッホの絵にあるような、燃える炎のような活力溢れる糸杉の植え込みが、跡形もなくなってしまった」と、夫妻は、がっかりしてしまった。この事件は、東西の中程にいる我々夫婦にとって、将来への大教訓になった。

実父が日本へ帰っておよそ3ヶ月後、「浅田の親爺が寝たきりで我がままで、病院からは愛想を尽かされ、家政婦とも喧嘩をするし、母方の叔母とも上手く行かず、浅田の母が1人で困っている」

と言う知らせが来て、富美子が、「1度、私だけでも帰りたい」と言い出した。アイヴィンに相談すると、「皆で1度、日本に帰っても良い」と言ってくれたが、しかし、良譲が小学校1年になって、やっと学校にも慣れ、英語にも慣れて来たのに、今学校を休ませるのは可哀想だということになり、ニルセン夫妻が、「君たちが日本に帰っている間、私たちが良譲を預かってもいい」と言い出した。

東住吉に帰って分かったことだが、私が1972年の4月、1人でヴァンクーヴァーへ立った日、浅田の親父は1人で庭仕事をしていて、梯子から落ちて腰を痛めた。以後、寝たり起きたりで、段々足腰が動きにくくなり、私達が1時帰国した頃には、足腰の関節は硬直し、食べ物もあまり取らなくなっていた。1日に1合か2合の好きだった日本酒位で、浅田の母(当時74歳)は「おじいさんはもう長くないのでは?」と言った。ベッドに寝ている姿はびっくりする程の変わりようで、2年半の空白の原因を作った自分が限りなく悔しかった。

浅田の母は昔から耳が遠くて、日頃から余り口数の多い人ではなかった。ある日、私と表の前裁の側で2人きりになった時、突然思い詰めたように私の前に立ち、もじもじしながら私の目を見つめてポツンと、「アメリカか?」と聞いて来た。いちいちアメリカとカナダの違いをうまく説明出来そうでもないで「そうだ」と答えた。「お祖父さんが亡くなったら、私も皆と1一緒にアメリカへ行く。」と言った。胸の辺りで握った両手の拳が血の気を失くなって小刻みに震えていた。富美子や孫たちに会えずに、寂しさの限界が来ているのがありありと感じられた。「良譲は、アメリカか?」と既に分かっていることを再確認して来た。「学校があるから置いて来た」と答えると、「うん」とうなずいて、にんまりとした。その目が、非常に寂しそうだった。後で富美子が言うには、この時すでに浅田の母は右の脇の下にしこりがあるのを訴えており、近くの開業医の畑中さんは、「もっと大きな病院で良く調べて貰いなさい」と言っていたそうだ。

私は富美子と淳子が後を追ってカナダへ帰って来てくれることを密かに祈って、2週間が経つと1人でカナダへ戻った。しかし、この時、飛行機の中で、『本当は、ひょっとして富美子と淳子には、



このまま離別して、もう合えないのでは?』と思った途端心臓がけいれんを起して、喉を通して突き上げて来るように苦しくなった。

ヴァンクーヴァー・エアポートでは、ニルセン夫婦と迎えに来た良譲は、口をつぐんだまま、目線だけが私を通り越して、無言で富美子と淳子の姿を探して潤んでいた。

数日後、学校から帰って来て、私の仕事が終わるのをミンク飼育場のゲートの外で、1人待っていた良譲が、老犬のジャーマン・シェパード、バンカーと遊んでいて、右目の脇1センチ程外のところにバンカーの犬歯が当たり大けがをした。余りに傷が目近く出血が激しかったため、私は本能的に極度の危機を感じて、その夜、カナダでの生活を1時諦め、2人で日本へ帰ることを決心した。富美子に、「六甲にあるカナディアン・アカデミーに良譲の転校を手配するよう」電話連絡した。後で、富美子が言うには、知らせを聞いて浅田の母は富美子に「アメリカへ直ぐ帰った方が良い」と促したそうだ。

ヴァンクーヴァーの日本大使館へ出向き「妻が先に帰国し、息子のパスポートが母親と併記されており、現在、息子はパスポートを所持していないが、——」と事情を話して「パスポートなしで息子が日本へ帰れるかどうか?」相談した。大使館では、「今まで使ったことがなく、これが初めてののですが、罪人などを送り返すための片道の旅券のようなものがありますから、それを此の度使いましょう。全く問題はない筈ですが、今度ヴァンクーヴァーへ帰られた際、次いでどの時に、羽田での様子を聞かせて下さい」と非常に親切で、その場で直ちに手配してくれて、心が動揺して困っていた私には感謝感激百倍であった。

日本に帰ると直ちに、富美子が「カナディアン・アカデミーに断られた」と言った。「カナダの永住権を持って、カナダに住んでいますが、父が危篤で帰って来ました。葬式が終わればカナダへ帰るつもりです。子供はカナダで1年生なので、その間転校させて下さい」と丁寧に日本語で電話したと言った。日本人の女性事務員がぶっさらばうに、「日本人なら、日本の学校にやりなさい」と命令したそうだ。

そこで今度は私が、それではと、出て来た女性に「ヘッドマスターに話したい」と英語で言うと、電話の向こうに出て来た女性が日本語を話そう

とした。少し躊躇したのを感じたが、分からない振りをして英語で押し通した。すると、校長の中年の女性が事務員と私の会話の中に英語を喋って、割って入って来た。私の願いを聞いた彼女は、無論、喜んで良譲の転校を即座に認め、不思議に何の抵抗もなかった。こちらが気を利かせて「ファーマーの子はカナディアン・アカデミーに向いていませんか?」と聞くと、「とんでもない、ファーマーの子でも大丈夫です、日本にも大きなライス・ファームが、沢山ありますよ」と全く仲間扱いする様子で教えてくれた。なぜ日本人の女性事務員に妻が日本語でお願いすると断られ、私が英語でヘッド・ミストゥレスに談判すると、当然のことのように転校が許されるのかが不思議でなかった。

その時、気が付いたことだが、日本に現住所を移すと子供を日本の学校へ行かす義務が生じるので、私は住所をうつせなかった。しかも、富美子は実父が富美子の国民年金を富美子のアパートの家賃の中から払い続けていたが、私も交渉したが、私のカナダからの掛け金を国が受け取りを拒否したため、払えなくなったままになってしまった。

その後、毎日、私は良譲の送り向かえに1日の大半を費やすことになった。南海線の田辺から文の里駅へ行き、徒歩で昭和町駅まで行って、地下鉄で梅田駅へ行き、阪急神戸線で六甲駅に出て、そこから徒歩でアカデミーへ向かって、片道約1時間半、往復3時間であった。それを私は1日に2回繰り返した。

浅田の母を府立成人病センターへ連れて行き、検査の結果乳ガンと言われた。それも、「相当進んでいる。直ぐに手術だ」と若い外科医は言った。当時、甥が、そこで内科医長をしていたので意見を聞いて見ると、「歳が歳だから様子を見た方が良い」と言われた。色々考えた末、「本人がカナダに来る事を望んでいるから、治療して置いた方が良い」ということになり、若い外科医の意見を取った。府立成人病センターは、予約が一杯で、直ぐには手術が出来ないので、若い外科医の良く知っている豊中市の曽根にある小林病院にお願いすることになった。本人は「治ればアメリカに1緒に行ける」と喜んで空元気を出して、手術台に乗った。医者が「元気なおばあさんだから」と抗瘤剤の量を間違えた。白血球のカウントが急に少な



くなり「鮮血でなければもう駄目だ」と医者が言った。慌ててO形プラスの鮮血を探した。富美子も私の姉も姪も甥も叔母もO形プラスだった。自分の血液が養母の体の中に大量に入っていくのを見て、富美子が聴力の良くない母に、「私の血だから、元気を出して！やっと、これで本当の親子になれる」と大声で言っているのが病室の外まで聞こえて来た。夕方には良譲と淳子連れて田辺に帰った。田辺には浅田の親爺がベッドに寝たきりで、実父の連合いが世話をしてくれていた。富美子は母の看病疲れで危ないからと、皆がひと晩だけその頃府立成人病センターの近くにいた私の長姉の所で休養するように勧めてくれた。その夜、母が1人で逝った。

私は日頃、胃の具合が良くなかった。スペース農場に行ってから、筋肉労働を誰にも負けないように率先して始めると、腹が減った。腹が減るから勢い良く、短時間に米の飯を唾液に混ぜる暇もなくかき込み、直ぐ働き始めた。そもそも昼休みが1時間あるようで、実はない。18歳や19歳の学生の頃なら、胃も酷使に耐えた。胃がひどく痛むものだから、日本の富美子の実父から、せんぶりや、アロエの乾燥粉末を送って貰い、それを頼張って、働き続けた。丁度いい機会だからと思って、母が府立成人病センターの外科で診て貰っているうちに、内科医長の甥に胃のレントゲンを実費で取って貰った。その結果を聞きに行くと、甥が「ちょっと待て、今、同僚のスペシャリスト(専門家)を呼ぶから」と、にわかに席を立った。スペシャリストなんぞと言うものだから、『これは重傷かな、潰瘍を通り越して、ガンになってしまっているかな』とひやひやしていると、甥が同僚を連れて来て、座っている私に立ったまま、「1体、カナダで何しとるんや」と、眼鏡の向こうの目の間にしわを寄せて、見下した視線を向けた。普段、私の周りでは、余り聞き慣れなくなってしまうために意外に思えた完璧な大阪弁だった。幸いなことに、どうやら胃のレントゲン・フィルムを前に、胃の向こうにある、背骨の減り方に興味があるようだった。

元々、背骨は学生時代のボート部の練習や、カッター訓練、筋肉トレーニングのウエイト・リフティング、水泳訓練の時の高飛び込みなどのせいで痛めがちで、余り自信がなかった。特に、学生時代に上半身を鍛え過ぎて、私の体型が、腰の割に、

その上にある上半身の部分が逆三角形に発達し過ぎ、重過ぎて負荷が腰に掛かり過ぎるようだ。背骨を垂直に保っていると、別段何も感じないが、手をつかないで、少しでも上半身を前にかがめると、てきめん腰に来る。高校時代に、ろくに栄養も摂らず、全く運動もせず、1日に20時間程、腰を曲げて、蒲鉾のように机の板に張り付いていたことも関係しているのかも知れない。人には振り返って、腹を突き出して、空威張りでもしているように見えるかも知れないが、私には、横になって寝転ぶ他には、これしか選択の余地がないのだ。自分でミンク場をやる時は、徹底的に機械化しなければ体がもたないと思っていた。甥は私が歩んだ高校時代、防衛大学時代や、それ以降のことを何も知らないのだ。

ともあれ、彼の同僚の「カルシウムを沢山摂れ」という忠告には従うことにする。大体、日本と北米とでは、何故だか、カルシウムの標準摂取量が全然違うことには以前から気が付いていた。当時、日本の厚生省は、成人1日600ミリグラムを勧めていたが、アメリカもカナダも成人1日1600ミリグラムを進めている。日本人の体格が悪いのは、このため(自己流に、塩分の取り過ぎも、1因だと思う)かも知れない。私がそのことを指摘すると、人は、カルシウムを摂り過ぎると、結石になると誤解していて耳を貸さない。しかし、北米にいる日本人は1日1600ミリグラム摂取している。

当時、何かで読んだことだが、カルシウムは、細胞間のコミュニケーションになくってはならないそうだ。骨密度が貧弱だと、カルシウムの血中濃度が貧弱で、体全体に不調が有ってもおかしくないことになる。幾らビタミンやミネラルや保健食やジュースや高価なものを食べても、骨粗鬆症の人には無意味かも知れない。カルシウムが多いと、細胞間のコミュニケーションズが十分で、充分体の機能が巧く働くので、結石には成らないそうで、寧ろカルシウムが血中に少ないと、細胞間コミュニケーションに支障が出来、機能が狂い結石になる事があるらしい。

気が付くと1月2日になっていた。親戚が集まって来て、義母の葬式の準備に取りかかった。どこも正月を祝っていて、仕出しが取れず、しかたなく、駅弁を探した。親戚と多くの近所の人が、部屋の中で立ったまま身動きの出来ない程沢山



集まって来た。

養父はベッドに寝たまま、いつものように自分の両手を見つめて遊んでいて、自分の回りで、何が起っているか全く御かまいなしのようである。誰の葬式か分かっていないようだった瞬間、義母がかわいそうになって涙が吹き出した。それを見て人が、「どうした。どうした」と聞いた。養母の葬式が何事もなく無事におわり、普通の生活がもどってきた。養父は朝起きると、ベッドの中で富美子から歯ブラシを渡して貰い、歯を磨き、富美子が大騒ぎしておしめを替えた後、顔と頭と手を蒸しタオルで拭く。時折、父はおしめにした自分の便を余り自由でない手で触り、所構わず寝具に擦り付けた。その後、淳子が1合入りのミルク瓶を手渡すと、嬉しそうに飲んだ。新聞は毎朝、読むことになっていたが、新聞が逆さになっていた。でも、別段気にならないようで、昼と夜に1合ずつ、時間を掛けて日本酒を飲んだ。私達が隣の部屋でテレビを見ていると、時々思い出したように、「うるさい」と言うことがあった。

1月29日の朝、いつものように親爺の顔を拭いていた富美子が、「パパおじいちゃんがおかしい。歯ブラシを持たせても直ぐ落とす」と言った。私は近くの医者の中野さんを走って呼びに行った。診療所に入り、屈んで、小窓越しに本を1人で読んでいる先生を見つけて「勉強中ですか」と挨拶すると、中野先生は私を見るなり1瞬、苦笑いを見せ、「いや、客が来ないので、薬価表を見ながら1番もうかる処方箋を勉強していたところだ」と言い、予期していたように直ぐに鞆を持って、私と1緒に走って来て呉れた。

結局、その年は葬式が1月に2回あった。葬式を派手にしたくないので、富美子が銀行に電話して、花輪を断っていた。それでも、浅田の親爺は土地の有力者との付き合いがあり、我々の知らない人からの花輪が並んだ。

以前日本にいて、医学書や百科事典の販売をしていたとき手伝ってくれていた富美子の従兄弟の公認会計士山口さんが1人で走り回って、相続の手続きを始めた。

その頃から、良譲が六甲のカナディアン・アカデミーまで1人で電車通学を始めた。カナディアン・アカデミーは日本の学校と違い、カナダと同じように6月が学年末だ。我々は子供の学校に合わせて、9月にカナダの学校の新学期始めに間に

合うように計画を立てた。淳子は地元の東住吉の幼稚園に4月から通っていた。アイヴィンが「夏に1ヶ月間、昔の女友達に会うために1人でノールウェイに帰りたい」と言うので、私だけがその間、奥さんの手伝いに戻ることになった。

「パパが行く所へ付いて行きます」と富美子と言うが、東住吉にいと何不自由なく生活して行けた。文化住宅から家賃は入るし、住む家も墓地も直ぐそこにあるので、いつでも墓参りが出来た。親戚も友達も近くににいるし、第1、北米では簡単に食えない、美味しい刺身や寿司が近くでふんだんに食えた。私は以前より1層英語もよく分かるし、又、ネイティブ・スピーカーの英会話塾か、医学書屋をやれば日本1の医学書セールスを達成するかも知れない。それでも私は家族を引き連れてカナダへ戻った。親戚は「どうしてだ」と聞いたが、私は『人生はチャレンジだ。』そのチャレンジは難しい方が遣り甲斐があると思っていた。興味を持ったり、憧れたり、想像したり、それについて調べることは重要だが、勇気を持って実際にやってみることが、1番重要だ。しかも、やり始めてからが本番で、死にものぐるいでやり抜くことに人生を賭けた。友達も親戚も先輩もいない外国で、手探りで生き抜いてみたかった。

私達は親戚に「法事には絶対帰ります」と約束して、東住吉の家は電気も電話も水道もガスも全部止めずにそのままにしてカナダへ帰った。

カナダに戻ると、3年間乗った真っ赤なフォルクスワーゲン・スーパー・ビートルを下取りに出して、フォード半トン小型トラックのスーパー・キャブを買った。驚いたことに、下取りの値段は2千カナダ・ドルで、その当時、米ドルとカナダ・ドルに余り差がなく、むしろカナダ・ドルが米ドルより少し良かったように覚えているから、下取りの値段が2年前の新車の値段1999米ドルを上回ったことになり、何となく不吉な予感がした。餌屋のスタンが「うちのミンク場をジミーに貸しても良い。月50ドル（水、電気代込み）で好きなように使って良い」と言い出した。基礎ミンク8百頭位の規模の飼育場で、「餌のかくはん機も使ってよし、前日に知らせれば毎朝、お前の好きな材料を用意して、グラインドしてかくはん機に入れる。餌代は他のミンク飼育者達と全く同じにする」と言う条件だった。我々がミンク・ビジネスを始めるのに良い条件だと率直に思った。（良



い話には、時には落とし穴がある）
 良譲が2年生を飛び越して、3年生になった。親
 から1人離れて、ニルセン宅にお世話になったこ
 とは、彼の頭脳に相当のショックと刺激を与え、
 同時に、やはり日本で毎日、通勤ラッシュ時に、
 六甲～田辺間、往復2回、計6時間の送り迎え
 をした甲斐があったと思った。あの半年間のカナ

ディアン・アカデミーの経験は彼にとって、有意
 義であったと思う。

(つづく)

+++++

11. 事務局だより

《新組織体制のご報告》

去る9月29日にZoomによる総会を開催し、以下の通り、16期新組織体制が決定した旨ご報告
 致します。前期まで事務局を担当頂いた島村晴雄氏は退任、豊口一美氏が就任、東原功氏は病により
 退任、鳥居雄司氏が就任という運びになりました。

島村氏には、5年近くの長きに亘り有難うございました。東原氏は短い間でしたが有難うございまし
 た。一日も早いご快癒をお祈り申し上げます。

尚、豊口氏には過去数年事務局をご担当頂き、当該NPOを盛り上げて頂いた中興の祖、鳥居氏は数校
 の都立高校長歴任のバランス感覚の主、お二方には一層の事務局へのお力添えを期するものです

《第16期 組織体制》 (敬称略)

理事	竹川 忠徳	理事長、事務局（官庁対応、会計）
理事	阿賀 敏雄	関西支部長、事務局（関西支部関連）
理事	山本 昌弘	元法政大学教授
理事	太田 治夫	弁護士 前東京弁護士会副会長
理事	宮崎 哲郎	元NPO 南国暮らしの会理事長
理事	豊口 一美	事務局（りらいぶジャーナル編集長、運営会議議長）
監事	鳥居 雄司	事務局（ホームページ作成・保守）
顧問	渡嶋 八洲夫	元キャメロン会会長
顧問	中野 寛成	元衆院副議長・国家公安委員長
		(ご就任年度順)

発行：特定非営利活動法人 リタイアメント情報センター（R&I）

〒100-0011 東京都千代田区内幸町 2-2-3 日比谷国際ビル 18 階

ウィップシステム(株) 内

●TEL 03-5860-9483 FAX 03-5860-9477

●事務局 E-mail : toyoguchi.k@gmail.com

●HP : <http://retire-info.org/>

(発行責任者) 事務局 豊口 一美